

「山田方谷 ～江戸時代に学ぶ財政改革」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 山田方谷の誕生とその半生

皆さんは、岡山県高梁(たかはし)市に、全国でも珍しい「人名由来の駅」があるのをご存知でしょうか。それはJR伯備(はくび)線の方谷(ほうこく)駅であり、地元出身で幕末期の陽明学者だった「山田方谷(やまだほうこく)」にあやかって命名されたものです。

ところで、平成24年(2012)年末に誕生した第二次安倍晋三(あべしんぞう)内閣による、「アベノミクス」と呼ばれる一連の経済政策によって、打ち続く不況からの脱却が目指されている昨今ですが、今から約160年前の幕末の頃にも、10万両(現在の価値で約600億円)の借財を抱えて破産寸前だった藩の財政を見事に立て直し、逆に10万両の蓄財を成しとげたという驚くべき実績を持つ人物がいました。実は彼こそが山田方谷その人なのです。

備中松山藩の財政再建を任された方谷は、20世紀の経済学者として名高いケインズに先駆けて積極的な財政改革を行い、充分過ぎる結果を残したのみならず、彼が編成した西洋風の兵学は、幕末の雄である長州藩(ちょうしゅうはん)も参考にしたほどでした。

今回の講座では、山田方谷の生涯と彼が遺(のこ)した数々の実績をたどりながら、現代のアベノミクスにもつながる財政改革とその神髄(しんずい)について詳しく紹介していきたいと思います。

山田方谷は、文化(ぶんか)2(1805)年に備中松山藩の農商であった山田家の長男として生まれました。山田家は清和源氏(せいわけんじ)の血を引いており、方谷の父は山田家の再興を願っていましたが、方谷は幼くして母や父を亡くすなどの苦労を重ねました。

そんな方谷を助けたのが学問でした。5歳の頃から朱子学や詩文を学んだ方谷は、わずか9歳の折に「将来は何になりたいか」と問われた際に、治国平天下(ちこくへいてんか)、すなわち「天下を治めるにはまず自分の行いを正しくし、次に家庭をととのえ、次に国家を治め、そして天下を平和にすべきである」と答えたと伝えられています。

文政(ぶんせい)12(1825)年、21歳になった方谷は、当時の備中松山藩主であった板倉勝職(いたくらかつつね)から俸禄(ほうろく)を与えられて、京都や江戸へ出て学問に勤(いそ)しむ日々を過ごした後、やがては武士として取り立てられるようになり、父の悲願であった山田家再興を成し遂げました。

30歳になった天保(てんぽう)5(1834)年、方谷は江戸で随一の儒学者といわれた佐藤一斎(さとういつさ

い)の門下生となり、同門の佐久間象山(さくましようざん)と競いながら陽明学を学びました。その後天保7(1836)年に故郷へ戻った方谷は、藩校の有終館(ゆうしゅうかん)の学頭(がくとう、校長のこと)に任じられ、自らも「牛麓舎(ぎゅうろくしゃ)」という私塾を開いて、藩士のみならず農民や女性にも学問を教えました。

そして嘉永(かえい)2(1849)年、45歳になった方谷は、新藩主の板倉勝静(いたくらかつきよ)から藩の元締役(もとじめやく)と吟味役(ぎんみやく)に任じられ、藩政改革を断行することになるのです。

2. 方谷による財政改革の全容

板倉勝静(かつきよ)は前藩主の勝職の養子であり、元々は江戸幕府の老中として寛政(かんせい)の改革を行った、松平定信(まつだいらさだのぶ)の孫という血筋でしたが、そんな名門を迎えた備中松山藩の財政は火の車であり、破綻(はたん)寸前でした。

藩の将来を憂慮した若き藩主の勝静(かつきよ)は、学問を究めた方谷にすべてを託し、農民出身でありながら、元締役と吟味役の兼任という、藩財政の最高責任者に抜擢(ぼつてき)したのです。

勝静(かつきよ)の熱意もあって、大抜擢に対する上級藩士の反発をよそに元締役と吟味役の兼任を引き受けた方谷でしたが、そんな彼の前に大きく立ちはだかったのが、天井知らずに積み上がった藩の負債でした。

長年の粉飾決算(ふんしょくけっさん、会社が不正な意図をもって経営成績および財政状態を実際より過大または過小に表示するように人為的操作を加えた決算のこと)もあって、当時の備中松山藩の累積(るいせき)赤字はおよそ10万両(現代の金額で約600億円)に達する巨額であり、また藩の石高(こくだか)は、名目の5万石に対して、実質は約19,000石の収穫しかなかったのです。これでは、従来の農政を中心とした財政改革など出来ようはずがありません。

そこで、方谷は自らが説いた経済論たる「理財論」や政治論たる「擬対策(ぎたいさく)」に基づき、従来の米本位経済にこだわらない大胆な手法で藩政改革を成しとげようと決意しました。

まず方谷は自ら大坂に出向き、集まった債権者の商人たちに対して、これまで粉飾決算を行ったことや、藩の実収が2万石に満たないことを、帳簿を持参したうえで明らかにしました。これらを正直に明かすことで、商人たちの信義を一時的には裏切ることになりますが、藩の再建のためには致し方ないと考えたのです。

同時に方谷は、商人たちに対して今後は一切借財をしない代わりに、返済期間を延ばした計画書を一人ひとりに手渡し、認められました。後の改革の成果を考えれば、計画書がよほどしっかりした内容だったことで、商人たちの信頼を勝ち取ったからではないかと思われまます。

また、方谷は大坂の蔵屋敷を廃止して、代わりに米を藩内に保管して、相場を見て売却するようにしました。これによって蔵屋敷の経費の節減と同時に、有利な時期に米を売ること多額の利益を

得て、そこから借財の返済に充(あ)てたのです。

蔵屋敷の廃止によって、藩内に年貢米を貯蔵する必要がありましたが、方谷は藩内各所に米を蓄(たくわ)える蔵(くら)を設けました。これらの蔵は飢饉(ききん)の際に米を配給するための倉庫の役割を果たしたため、幕末の飢饉において、備中松山藩では一人の餓死者(がししゃ)も出さなかったそうです。

財政改革には産業の振興が欠かせませんが、備中松山藩の領内では昔から良質の砂鉄や銅が産出することに方谷は目を付け、これらの鉱山を藩が買い取って直営とすることで、多くの農民を雇い、彼らの失業対策に一役買うことにつながりました。

次に方谷は、農作業の負担を軽減するために、良質な砂鉄を使った三本歯の「備中鋤(びっちゅうぐわ)」を新たに開発し、当時の我が国の人口の 8 割を占(し)めた農民に幅広い人気を集めたほか、建築に欠かせない鉄釘(てつくぎ)もよく売れました。方谷はこれらの人気商品を、新たに購入した大きな船で直接江戸まで運ぶことで、経費を節減するとともに大量輸送を可能とし、さらなる売り上げ増につなげました。

また方谷は、農民の暮らしを向上させるために柿や煙草(たばこ)などを栽培したほか、柚餅子(ゆべし)などのブランド品を新たに生み出し、これらも藩の特産として、全国で売り上げを伸ばしていきました。

なお、方谷はこれらの産業振興に関する業務を撫育方(ぶいくがた、撫育とは人をいつくしみ育てること)と名付けた組織にまとめ上げ、流通を一本化したことで効率化も図っています。

ところで、当時の我が国では小判や豆板銀、あるいは寛永通宝(かんえいつうほう)といった金・銀・銅貨が流通していましたが、これらの発行権は江戸幕府が独占していたため、各藩にはそれぞれ独自の藩札を発行することが認められていたものの、額面どおりの金貨にいつでも引き換えが可能な兌換性(だかんせい)が義務づけられていました。

しかし、財政難に苦しんでいた備中松山藩では、兌換のための準備金にまで手を付けていたどころか、新たに大量の藩札を発行したことですっかり信用を無くし、偽札まで出回る始末でした。

事態を憂慮した方谷は、3 年間という期限を切って信用の無くなった旧藩札を回収し、すべて新しい藩札に切り替える決意をしました。当時は産業復興が進んで藩の資金が充実しつつあったとはいえ、兌換のための準備金を調達するのは大変な苦勞を伴いましたが、人間でいえば血液の循環(じゅんかん)にあたる紙幣の流通を円滑に進めることは、藩の再建に不可欠だったのです。

やがて期限の 3 年を迎えると、方谷は引き換えた大量の旧藩札を領内の河原に積み重ね、領民が見守る前で焼き捨てました。現代の観点からすればパフォーマンスとも思われかねない突飛な行動でしたが、方谷の姿勢に並々ならぬ覚悟を見た領民たちは、新たに発行された藩札を信用して、やがて他国にまで流通するようになりました。

次々と藩政改革の施策(しやく)を考案しては実行に移した方谷ではありましたが、そんな彼の改革を支えていたのは、藩を挙げての儉約令でした。方谷は武士の俸禄を減らすとともに賄賂(わいろ)を禁止し、奢侈(しゃし、ぜいたくすること)を強く戒めた一方で、自らの家の会計を他人に任せてその収支を明らかにしました。

次に、盗賊の取り締まりを厳しくしたり、賭博(とぼく)を禁止したりすることで領内の治安を向上させたほか、領民が誰も投書することができる目安箱(めやすばこ)の設置を行いました。また、先述したように、蔵屋敷の代わりに領内に40カ所余りの貯倉を設けたことで、凶作の際の飢餓(きが)対策に大いに役立ちました。

その他、産業振興を名目として、道路や河川の改修といった公共投資も積極的に行いました。交通の便が良くなったことが、藩内における人々の行き来や物資輸送の円滑さを生み出し、さらなる経済効果をもたらしたのです。

「不況の際は積極的に公共投資を行うべし」。20世紀の経済学者であるケインズよりも80年以上も前に実践した方谷の優秀さには、驚くしかありません。

財政改革を成しとげるには優れた施策を行うことが重要ですが、同時に、藩のみならず我が国を支えるだけの優秀な人材の育成が不可欠であることが、長年藩校の学頭(=校長)を務めた方谷には分かっていました。

そこで、方谷は藩校の有終館を拡張したり、領内に「学問所(がくもんじょ)」や「教諭所(きょうゆじょ)」を設けたりしたほか、郷学(ごうがく、藩士の教育や庶民の教育のために各地に設けられた学校のこと)や私塾、あるいは寺子屋を次々と設置したことで、教育の施設の充実ぶりは、他藩をはるかにしのぐようになりました。

方谷は藩士以外の領民の教育に力を注いだだけでなく、特に成績優秀な者は、農民や商人出身でも藩士へ取り立てたことで、子弟はすべて向学心に燃え、藩の教育水準が向上するとともに、方谷の財政改革への理解度も高まりました。

こうした思い切った教育改革も、方谷自身が農商の出身でありながら、元締役と吟味役を兼任するまでに出世したという経験が下地(したじ)にあったからに間違いありません。

方谷が財政改革を始めた1850年代は、アメリカのペリーが黒船を率いて浦賀に来航し、我が国に開国を迫るなど国際的な動きもみられるようになりましたが、こうした社会情勢のなかでは、軍制の改革も不可欠であると方谷は考えました。

方谷は自ら学んだ砲術をもとに、大砲を鑄造して洋式兵術を導入したほか、嘉永5(1852)年には領内の庄屋の家の壮健な若者を選んで銃と剣を学ばせ、帯刀(たいとう)を許して「里正隊(りせいたい)」という農兵制を組織しました。

方谷は里正隊の教育や指導に力を注いだほか、領内の漁師や一般農民の中からも壮健な者を集めて西洋式の砲術や銃の訓練を行い、国境の防備の一部を担当させました。陽明学という実践に重きを置く学問を究めた、方谷ならではの柔軟な発想が生み出した軍制改革といえるでしょう。

こうした方谷による藩を挙げた財政改革が実を結び、備中松山藩は改革の開始からわずか7年後の安政(あんせい)4(1857)年頃には、10万両あった借財をすべて返済して、逆に10万両の蓄財を成し遂げたのみならず、実質2万石にも満たなかった藩の収入は、20万石にも匹敵(ひってき)するといわれるようになり、領内の治安の良さや領民の安定した生活と教育の振興ぶりは、他藩からの旅行者がうらやむほどとなりました。

方谷による藩政の改革は、歴史的にも稀(まれ)に見る素晴らしい成果を上げたのです。

3. 他藩も参考にした方谷の改革精神

改革を成しとげて国内有数の富国強兵藩となった備中松山藩には、その成果を参考にしようと他藩からの旅行者がひっきりなしに訪れましたが、ここでは代表的な2名を紹介しましょう。

備中松山藩の改革成功の噂を耳にした、越後長岡藩士の河井継之助(かわいつぎのすけ)は、本当かどうかを自分の目で確かめたくなくて、安政6(1859)年に方谷を訪ねました。当初は農商出身の方谷を「山田」と呼び捨てにしていた継之助でしたが、方谷による言行一致の見事な振る舞いや、彼が進めた藩政改革の成果を見て「山田先生」とすぐに態度を改め、深く心酔するようになりました。

方谷から多くを学んだ継之助は、帰藩後に越後長岡藩の藩政改革を断行して多くの成果を収めました。後、北越戦争において官軍と戦った際に負傷し、明治元(1868)年に42歳で亡くなりました。

臨終の際、継之助は「もし備中松山に行くことがあれば、河井は生涯先生の教えを守ったと方谷先生に伝えてもらいたい」と言い残したそうです。

河井継之助にさかのぼること1年前の安政5(1858)年、長州藩士の久坂玄瑞(くさかげんずい)が備中松山藩を訪問し、西洋の銃陣法(じゅうじんほう)を訓練中の方谷に会いました。

里正隊を中心とする見事な訓練ぶりに感嘆した久坂は、単なる財政改革の成功だけではなく、教育面や軍事面など身分制度にとらわれない様々な改革によって優秀な人材を輩出しているところに、軍政の神髄が存在することを理解しました。

後に久坂は元治(げんじ)元(1864)年の禁門の変において負傷して自刃(じじん)しますが、生前の久坂から方谷の話を聞いていたとされる高杉晋作(たかすぎしんさく)によって「奇兵隊(きへいたい)」が組織され、幕末における長州藩を軍事面から支えましたが、方谷による里正隊は、奇兵隊よりもおよそ10年近くも早く結成されていたこととなります。

これらのように、方谷による藩政改革の成果は全国的な評判を呼んで、他藩の改革にも多大な影響を与えましたが、それは同時に備中松山藩自体にも数奇な運命をもたらすことになりました。

4. 藩を救った改革とその後の方谷

備中松山藩主の板倉勝静(かつきよ)は、嘉永 4 (1851) 年に江戸幕府の奏者番(そうじゃばん)になると、安政 4 (1857) 年には寺社奉行を兼務しました。その後、大老の井伊直弼(いいなおすけ)の逆鱗(げきりん)に触れて一度は職を解かれたものの後に復帰し、文久(ぶんきゅう)2 (1862) 年には老中にまで出世しました。

勝静(かつきよ)がこれらのような出世街道を歩んだ理由としては、元々の血筋が松平定信の孫であったこともあると思われますが、やはり方谷による藩政改革の成功によって藩財政が豊かになったことや、それに伴って勝静(かつきよ)自身の評判も高まったことが考えられます。

しかし、時は幕末の動乱期であり、やがて大政奉還が行われて戊辰(ぼしん)戦争が始まると、老中首座である勝静(かつきよ)を藩主とする備中松山藩はいわゆる「朝敵」となり、朝廷から松山藩の征討を任じられた、備前岡山藩など近隣の藩の大軍が押し寄せてくるという騒ぎになりました。

このとき、藩主勝静(かつきよ)は旧幕府軍側の立場で参戦して不在であり、重臣たちは抗戦か降伏かをめぐって激しい議論が続きましたが、最後には方谷が独断で降伏を決めました。

「戦争になって一番困るのが藩民である以上、彼らの生命を救うのが我が天命である」。場合によっては自身の切腹も辞さない、という決死の覚悟でした。

備中松山藩による降伏の申し出を受けた征討軍は謝罪書の提出を要求し、官軍側が前もって作成した文書を松山藩に持ち帰らせましたが、その草案に書かれていた「大逆無道(たいぎやくむどう)」の四文字を見た方谷は激怒しました。

「親殺しや主君殺しを意味する大逆無道を加えるとは何事か。我が藩は一度たりとも朝廷に刃(やいば)を向けたことがない以上、この四文字は自らの命に代えても受けいられない」。

方谷による命がけの抗議に対して官軍も折れ、最終的に「軽挙暴動(けいきよぼうどう)」に変更することで、備中松山藩は無血開城しました。また方谷は、旧幕府軍に随行していた藩主の勝静(かつきよ)を強引に東京へ連れ戻して新政府へ自首させたことで、5万石を2万石に削られこそしたものの、明治 2 (1869) 年には藩の再興が認められました。

藩主が老中首座という重職にありながら、備中松山藩の処分が他藩に比べて軽かった背景には、方谷が組織した里正隊が本格的な軍隊であったことによる抑止力や、方谷が地元の農民から「生き神様」と慕われていたこと、そして何よりも方谷の財政家としての類稀(たぐいまれ)な手腕を惜しんだからではないかと考えられています。

なお、方谷は、慶応3（1867）年に行われた大政奉還において、上奏文（じょうそうぶん、なお「上奏」とは天皇に意見や事情などを申し上げること）の草案を作成したという説もあります。

時代が変わり明治維新を迎えると、岩倉具視（いわくらともみ）や大久保利通（おおくぼとしみち）、あるいは木戸孝允（きどたかよし）といった明治新政府の重鎮が、政府への出仕を求めて、方谷に何度も使者を送りました。財政問題に悩んでいた新政府からすれば、財政改革を成しとげた方谷の手腕が何としても欲しかったのでしょう。

しかし、江戸幕府の老中首座だった藩主の板倉勝静（かつきよ）に長年仕え、同時に彼を支え続けてきた方谷は、年齢のこともあって新政府への出仕を断りました。

その後の方谷は、備中へ戻って私塾を開いたほか、我が国最古の庶民のための学校であった閑谷（しずたに）学校を再興するなど、弟子の育成に力を尽くしましたが、明治10（1877）年に73歳でこの世を去りました。

方谷が亡くなってから約50年経った昭和3（1928）年、方谷ゆかりの地に国鉄（現在のJR）伯備線が開通した際に、地元民の熱意によって「方谷駅」がつくられたほか、21世紀の平成18（2006）年には、それ以前の昭和52（1977）年に岡山県出身の天文学者が新たに発見した小惑星に対して、「山田方谷」と名づけることが認められました。

藩のためだけでなく、名もない多くの領民のために心血を注いだ山田方谷の生き様は、時代を超えた今もなお、多くの人々に慕われ続けているのです。

5. 「アベノミクス」成功の切り札として

さて、平成24（2012）年末の衆議院総選挙で勝利して、第二次内閣を組織した安倍晋三首相は、打ち続くデフレ不況からの脱却を目指して、「アベノミクス」と呼ばれる思い切った経済政策を行うことを目標に掲げ、そのための「大胆な金融政策によるデフレ脱却戦略」や「機動的な財政政策」、そして「民間投資を喚起（かんき、呼び起こすこと）する成長戦略」という、いわゆる「3本の矢」が注目を集めています。

平成24（2012）年11月の衆議院解散以後、1ドル70円台の超円高だった円相場は一時期120円台にまで変化し、また日経平均株価も8,600円台から、同じく一時期は20,000円台を突破しましたが、今後のさらなる戦略に期待が持たれるところではあります。

しかし、経済政策の神髄は、単なるデフレ脱却だけではなく、我が国の歴史や伝統、あるいは文化に根差（ねざ）した環境の下において、各人の努力や創意工夫が正当な評価を受けるという「当たり前のこと」が実現できるところにあり、そのためにも、次代を担（にな）う子弟に対する歴史や道徳を始めとする教育の正常化や、他国からの侵略を防ぐための防衛力の強化も同時に必要なのではないのでしょうか。

そんな私たちに対して、大きな歴史の流れは格好のお手本を目の前に示してくれています。それはもちろん山田方谷のことです。

山田方谷は大胆な改革によって藩の財政を立て直しましたが、その基本となったのは、彼が長年務め上げた教育者としての矜持(きょうじ、自分の能力を優れたものとして誇る気持ち)でした。士農工商の身分を超えて多くの優れた人材を育て上げた教育精神が、彼の経済政策を成功に導いたことは間違いありません。

また、いかに財政が豊かになろうとも、藩を守るためには軍制の改革が欠かせません。方谷が壮健な者を選(え)りすぐって里正隊という独自の軍隊をつくり上げたことは、戊辰戦争の際の大きな「抑止力」として、備中松山藩を救う結果となりました。

これらの例を見ても分かるように、経済政策の成功のカギは、単なる金融政策や財政政策だけでなく、将来を見据(みす)えた「教育」や「防衛」こそが握っているのであり、アベノミクスの成功の可否も、これらの問題の解決にかかっているとしても過言ではないでしょう。

10万両の借財を短期間ですべて返済したばかりか、逆に10万両の蓄財を達成し、実質2万石に満たなかった藩を、20万石の実力があると周囲に認めさせるほどの改革を成し遂げた山田方谷。

平成25(2013)年1月に行われた衆議院本会議の代表質問において、平沼赳夫(ひらぬまたけお)議員が発言されたように、我が国が本当の意味で「強い国家と豊かな生活を取り戻す」ためにも、私たちは今こそ山田方谷の精神に学ぶべきではないでしょうか。(完)

主要参考文献：「入門 山田方谷」(著者：山田方谷に学ぶ会 出版：明德出版社)
「山田方谷の夢」(著者：野島透 出版：明德出版社)

YouTube 再生リスト「山田方谷」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML5sSUCN8CM6pncDVoo3InBH>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>